

搾乳機失い母牛処分

3年前に他界した父が始めたこの地で酪農に携わり、間もなく40年がたつ。現在の総飼養頭数は約140頭。年間400トンを生産し、農協を通して加工用の乳製品として出荷され、収入を得ていた。そうした平穏な日常を自然の猛威が一瞬にして奪い去った。「町内で搾乳機械まで失ったのはうちだけと聞いた。何から手を付ければいいのか…」

酪農を続けようにも現実には甘くない。牛舎に限らず、搾乳に必要な数千万円もの機械をそろえる資金は簡単に用意できない。後継問題もあり、「廃業を余儀なくされた状態だ」。母牛は乳房炎を考慮して、半数以上を既に廃棄した。生き残った25頭の子牛は小屋で飼育している

が、「大きくなれば引き取り手を探すしかない。今の状態では行き場を失った牛を守ることさえできない」と嘆く。

水調達に追われる

町内では今も断水が続く。酪農家にとって水の確保は生命線。乳牛の飼育や搾乳に水を大量に使うため、町内の各酪農家も水の調達に追われて疲れの色が見えている。「人も牛も水があるから生きられる。町、道、国には農業用水のいち早い復旧を講じてほしい」。生き残った子牛を眺めながら、岩田さんが絞り出すように言った。

貨物輸送力が半減 農業出荷に苦慮 JR不通

2016年9月13日

台風10号の影響でJR根室線・石勝線が寸断され、十勝の農産物などを本州方面に運び出す貨物輸送が滞っている。帯広貨物駅（西20南1）に集まる鉄道コンテナは、台風後はトラックで札幌へ代行輸送されているが、輸送能力は貨物列車の半分以下。秋の出荷最盛期を迎え、農業関係者は頭を痛めている。



帯広－札幌間の鉄道が寸断された影響で、コンテナが滞留するJRの帯広貨物駅（13日）

帯広－札幌間のJR根室線・石勝線は、新得町内などで橋が流され、復旧は12月以降になる見通し。特急とともに貨物列車も運休が続いている。

JR貨物北海道支社によると、帯広から貨物列車で運ぶのは農産物や粉乳、砂糖、薬品、鉄スクラップなど。

5日からはトラックによるコンテナの代行輸送を始め、現在は40～50台態勢で鮮度が重要な農産物を優先している。ただ貨物列車が5トンコンテナを1日約420個運べるのに対し、トラックは約150個程度。同支社は「通常なら滞留することはない」というコンテナが、13日朝には帯広駅に約40個積み上がった。

帯広市内の大手運送会社ではトラック10台で代行輸送するものの、「運転手不足が業界の課題として挙がる中、人員をやりくりするのも大変」とし、鉄道貨物を全てカバーするのは難しい状況だ。

大きな影響を受けるのが農作物の出荷。11月までは、ジャガイモやタマネギなどが最盛期で、例年なら5トンコンテナで1日100～150個を全国各地へ送っていた。

今年はトラック代行で札幌まで運んで貨物列車に載せているが、輸送力は例年の5割程度にとどまっている。近年は鉄道輸送にシフトしていることもあり、ホクレン帯広支社では「輸送繁忙期で非常に厳しい状況。輸送力の上積み进行を要請している」とする。

穀物卸売りの丸勝（帯広）の梶原雅仁社長は「船便にも代えているが、鉄道に比べてきめ細かい対応がしにくい。コストも上がるが、お客への供給責任は大事で物流を止めることはできない」と語る。

JRでは今後、輸送力を上げるためコンテナを釧路港まで運んで、青森県八戸や東京行きの貨物船に載せる計画だ。トラックの台数は「もう少し増やすことができればいい」（JR貨物北海道支社）と見込みを示す。

ホクレンは「今年は品質や収量に苦労しながらやっと収穫した作物なので、何としても運んで消費者に届けたい」としている。